平成二十七年七月投句

紅塵に千木を隔して夏木立　滝音を頼りに標なき道を

釣灯籠灯りて二つ梅雨曇　勝利　かなかなや御神楽殿に灯のともり　光子

女一人鳥居くぐり来夏木立　夏草に豊前筑前分かつ石

新しき蝉の抜け殻透けてをり　竹枕竹夫人片寄せし部屋

葛餅のゆれつつ皿におさまりぬ　佳与子　百合花粉またつけて犬戻り来し　真理子

飴色は旅館の歴史竹夫人　郊外の高校へ混む梅雨のバス

雨の蟻いっせいに幹下りはじめ　夫のもとへ行けとささやく青田風

追山笠に見入る人にも勢い水　節子　地上にも地下にも迷ひ拭ふ汗　由紀子

浮人形忘れた人の浮いてくる　炎暑より逃れ都心の地下通路